

マタイによる福音書25章 「キリストからの報い」

1A 用意する(十人の乙女) 1-13

1B 眠ってしまった乙女たち 1-5

2B 突如の到来 6-13

2A 管理する(タラントを任された僕) 14-30

1B 商売 14-18

2B 清算 19-23

3B 没収 24-30

3A 憐れむ(最も小さき者) 31-46

1B 選り分け 31-33

2B 正しい者(羊) 34-40

3B 悪者(山羊) 41-46

本文

マタイによる福音書 25 章を開いてください。私たちは今、イエス様が、ご自分が再び戻られる時のことについて、弟子たちに教えられています。世の終わりの徴がどのようなものであるかを示されてから今度は、「ただし、その日、その時がいつなのは、だれも知りません。(24:36)」と言われて、ご自身が来られる直前まで前兆がなく、突如として来ることをお語りになっています。その矛盾しているように見える言葉には、再臨には二段階あり、一つは教会のために来られて、教会が空中にまで引き上げられる携挙があり、もう一つは、教会と共にキリストが天から地上に戻ってこられる地上再臨があることを話しました。

初めに、ノアの日のようであると主は言われましたが、それは「目を覚ましていなさい」ということを強調するためです。主が来られるのが突如なのだから、いつでも、今、来られても用意ができていようにしていなさいということです。私たちが、世の楽しみを味わっていて、それで主が来られたら恥ずかしくないでしょうか？目を覚まさないといけません。そして次に盗人が来る時のようなものと言われました。ここでは、「思いがけない時に来られる」ことが強調されています。自分たちが安全だ、平和だと言っているような時に来られるのです。物事を表面的に見て、「ああ、大丈夫じゃない」とやっているときに最も危ないのです。そして三つ目の譬えは、「忠実さ」でありました。悪いもべは主人は来ないとして、手抜きして、仲間を打ち叩いていました。けれども、賢いしもべは、いつ来てもよいように、いつも食事時に仲間に食事を与えていました。

1A 用意する(十人の乙女) 1-13

そして 25 章に入ります。イエス様は 1-13 節にて「きちんと用意しているのか、どうか？」が問わ

れています。

1B 眠ってしまった乙女たち 1-5

1 そこで、天の御国は、それぞれともしびを持って花婿を迎えに出る、十人の娘にたとえることができます。2 そのうちの五人は愚かで、五人は賢かった。3 愚かな娘たちは、ともしびは持っていたが、油を持って来ていなかった。4 賢い娘たちは自分のともしびと一緒に、入れ物に油を入れて持っていた。

イエス様は、再び「天の御国は」と言われて、天の御国を譬えで説き明かしておられます。ここに出て来るのは十人の乙女です。十というのは聖書で、試される時にしばしば使われている数字ですが、ここでも自分たちが用意しているのかどうか、試されています。そして、知恵にある乙女たちと、そうではない愚かな乙女たちに五人ずつで分けておられます。箴言のことを思い出します、箴言は知恵ある者と愚かな者の対比で、その諺が続いています。知恵というのは、知識があるだけでなく、その知識を適切に適用しているということです。知っているだけでなく、知っていることに基づいて行動に移していることです。愚かな人は、そこまで考えるのを怠ります。そこまで行動に移すのは億劫だ、面倒くさいと思います。

この譬えでは、「油を用意する」というところに表れています。ある注解書によると、この「ともしび」というのは、灯皿のようなものではなくて、もしかしたら松明のようなものだったかもしれないと書いてありました。太い木の枝に油を含ませて布を先に付けてそれで火を灯します。もし、そのような松明だったのであれば、15分ぐらいしか持ちません。当然、油を用意しておく必要があるのです。だから用意していたのは賢いと呼ばれ、用意していないのは愚かと呼ばれます。

ところで、この花婿を迎えることについての背景説明を致します。当時は、結婚についてはもちろん、双方の父親によるお見合いです。そして花婿の父が、花嫁の父に花嫁料を支払います。婚約をすると、最低一年間、間を置きます。マリアがイエス様を身ごもったのも、その期間に起こりました。そして花婿が花嫁を迎えに行く段階に入ります。花婿が花嫁の家にまで出向きます。そして、花嫁のために整えられた家に彼女を連れ帰ります。その時に、乙女たちが行列を作って一緒について行くという習慣があり、その場面をイエス様がお語りになっているのです。

そして、イエス様と教会との関係において、イエス様が戻って来られる時、花婿が花嫁を引き連れることに基づいて語っておられます。「ヨハネ 14:3 わたしが行って、あなたがたに場所を用意したら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしがいるところに、あなたがたもいるようにするためです。」エペソ5章には、夫婦関係についてパウロが語っている時に、キリストが教会を花嫁として整えてくださることを教えています。黙示録の最後にも、「御霊と教会が言う。『来てください。』」「しかり、わたしはすぐに来る。」とあります(22:17,20)。

5 花婿が来るのが遅くなったので、娘たちはみな眠くなり寝入ってしまった。

花婿が来るのが遅くなるのは、しばしばあることでした。花婿が来るという知らせが流れても、それですぐに来るわけではなく、また「来ます」という知らせが流れ、そういった知らせが何度となく流れてきます。それで夜になって、乙女たちはみな眠くなって寝入ってしまっています。

イエス様は、ここでご自身が戻られるのは、夜の時だと言うことをほのめかしています。「遅くなった」というのは、主が一向に戻ってこられないと思っている状態です。そのために、悪や不法が満ちていることを暗闇と呼んでいます。そして教会は、光の子であるはずなのです。そうした世の流れにいつの間にか迎合してしまい、神の真理が見えなくなってしまう状況です。

2B 突如の到来 6-13

6 ところが夜中になって、『さあ、花婿だ。迎えに出なさい』と叫ぶ声がした。7 そこで娘たちはみな起きて、自分のともしびを整えた。8 愚かな娘たちは賢い娘たちに言った。『私たちのともしびが消えそうなので、あなたがたの油を分けてください。』9 しかし、賢い娘たちは答えた。『いいえ、分けてあげるにはとても足りません。それより、店に行って自分の分を買ってください。』

夜に突如として、主が来られたという声がします。これまでイエス様が言われていたように、突如として主が来られます。そして、賢い娘が「いいえ、分けてあげるにはとても足りません。」と言っているのに注目してください。そうです、主の救いについて、人は他の人に分け与えることはできません。本人が自覚して、自分自身で救いをイエスの御名によって受け取らない限り、他の人が分け与えることはできないのです。

10 そこで娘たちが買いに行くと、その間に花婿が来た。用意ができていた娘たちは彼と一緒に婚礼の祝宴に入り、戸が閉じられた。11 その後で残りの娘たちも来て、『ご主人様、ご主人様、開けてください』と言った。12 しかし、主人は答えた。『まことに、あなたがたに言います。私はあなたがたを知りません。』

行列を組んで花婿が花嫁を引き連れて行き、それから花婿の家では婚礼と婚宴があります。婚礼、結婚式は少人数で行ないます。そして婚宴には多くの人々が招かれて、それが七日間続きます。キリストが教会の為に戻って来られて、教会が引き上げられた後に、黙示録 19 章においてはそれを、「子羊の婚宴」として描いています(9 節)。

当時の背景の話に戻りますと、花婿の家に到着したら戸を閉じます。その戸を閉じる時の鉤を掛ける時の音がかなり大きく響きます。ガチャンという音が出ます。それから、婚礼と婚宴が行われるのですが、後からその戸を開けさせるというのは、主催者である花婿に対して大変失礼です。高

額の入場料を支払った演劇に、演劇が始まったのにその戸を開けて前の席に動くようなものです。

そして、その主人の行った言葉がどこかで聞き覚えがあるものです。「私はあなたがたを知りません。」これは、偽預言者について主が語られた時に、彼らがどんなに、主よ主よと呼び求めても、主の名によって預言をしたり、不思議を行ったとしても、「わたしはおまえたちを全く知らない。不法を行う者たち、わたしから離れて行け。(7:23)」と言われました。つまり、この愚かな娘たちは、主イエスを知っているようで、実は知らなかった人たちと言えます。イエス様のことは、言葉で聞いているかもしれませんが、主との関わりを持っていなかった人たちです。そして、イエスの名を語っていても、実質、イエス様からは離れている人です。

この譬えだけでなく、聖書には、暗闇の中の光としてキリストが来られ、私たちもキリストの光を輝かせることが書かれています。どのようにして光を灯し続けることができるのか？それは聖霊によります。ヨハネ第一で、油は聖霊のことを表していることが教えられています。ですから、聖霊によって、私たちがイエス様を人格的に知り、その関わりの中から光を輝かせるということを知る必要性を教えています。パウロはテモテに、こう言って励ましました。「自分に委ねられた良いものを、私たちのうちに宿る聖霊によって守りなさい。(2テモテ 1:14)」聖霊によって守ります。

13 ですから、目を覚ましていなさい。その日、その時をあなたがたは知らないのですから。

ここでイエス様が言われている、「目を覚ましていなさい」というのは、必ずしも全く眠らないということではありません。なぜなら、賢い乙女たちも夜が遅くなって、眠ってしまっていたからでした。けれども、ある意味で目を覚ましていました。というのは、眠ってしまった時のためにも、前もって備えていたからです。何かが起こってからでは遅い、だから何が起こるかを前もって見極め、それで用意ができています。霊的に目を覚ましているということは、そういうことです。自分でよく考え、祈り、それでいざ何かが起こった時に、聖霊によってそこで判断ができるということです。

賢さというのは、用意していたというところにあります。愚かというのは、近視眼的です。今、自分の目に見えているものだけで物事を判断していることです。このようなことが起こるかもしれないから、万が一に備えてこうしておくという用意がないのです。目の前にあることの対処だけをして、先んじて用意していないので、それで何かが起こると、これまでキリスト者だと思って生きてきたことが生かされないままになってしまいます。

2A 管理する(タラントを任された僕) 14-30

次に、また別の天の御国の譬えをイエス様が語られます。ここでは、今、出てきた話、「イエスを知っているようでいて、実は関わりを持たないで生きてきた」という問題をイエス様は取り扱います。そして、午前礼拝でお話ししましたが、主が戻られるというのは、その時が今までしたことの清算

の時だ、報いを受ける時だということを見て行きたいと思います。

1B 商売 14-18

14 天の御国は、旅に出るにあたり、自分のしもべたちを呼んで財産を預ける人のようです。15 彼はそれぞれその能力に応じて、一人には五タラント、一人には二タラント、もう一人には一タラントを渡して旅に出かけた。するとすぐに、16 五タラント預かった者は出て行って、それで商売をし、ほかに五タラントをもうけた。17 同じように、二タラント預かった者もほかに二タラントをもうけた。18 一方、一タラント預かった者は出て行って地面に穴を掘り、主人の金を隠した。

イエス様はまず、主人が旅に出かけるという想定を作っておられます。裕福な主人が遠い所に旅に出かけることはよくあることです。当時の旅は、どんなに注意深く計画したとしても、その通りにはならないものです。いつ戻って来るのかも、そのためあまり分かりません。そして、かなりの額をそれぞれの僕に任せます。一タラントは6000デナリで、1デナリが当時の一日分の労賃に相当するので、6000日分の労賃です。仮に一日1万円の収入だとすると、五タラントの人は三億円、二タラントの人は1億2千万円、そして一タラントの人は6000円万円です。ですから、主人はかなり信用のある僕のみ任せ、高額な資金運用ができる能力を見て、それぞれの能力に応じて、任せています。商売と言っても事業に限らず、銀行に預けることも立派な資金運用です。五タラント、二タラントの僕は行いましたが、一タラントの者は地面に穴を掘りました。

2B 清算 19-23

19 さて、かなり時がたってから、しもべたちの主人が帰って来て彼らと清算をした。

十人の乙女の譬えでもそうでしたが、自分たちが思うよりも遅く戻って来ることが暗示されています。イエス様は、すぐに来られると言われても、私たちにとっての「すぐ」ではないという含みがあります。このことは既にペテロが第二の手紙で取り扱っていたことであり、3章4節で「彼の来臨の約束はどこにあるのか。父たちが眠りについた後も、すべてが創造のはじめからのものではないか。」とあざける者たちが既にいました。そしてペテロは、主は火でもって来られることを警告し、こう言ったのです。「Ⅱペテ3章3:8-9 しかし、愛する人たち、あなたがたはこの一つのことを見落としてはいけません。主の御前では、一日は千年のようであり、千年は一日のようです。主は、ある人たちが遅れていると思っているように、約束したことを遅らせているのではなく、あなたがたに対して忍耐しておられるのです。だれも滅びることがなく、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。」

20 すると、五タラント預かった者が進み出て、もう五タラントを差し出して言った。『ご主人様。私に五タラント預けてくださいましたが、ご覧ください、私はほかに五タラントをもうけました。』21 主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。おまえはわずかな物に忠実だったから、多く

の物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』22 二タラントの者も進み出て言った。『ご主人様。私に二タラント預けてくださいましたが、ご覧ください、ほかに二タラントをもうけました。』23 主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。おまえはわずかな物に忠実だったから、多くの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』

財産を預かっているというように、私たちそれぞれが、神の賜物を与えられています。そして、信仰の量りにしたがって与えられています。それらを主人のため、つまりイエス様の為に用いるということ。自分の生活や人生そのものが、イエス様によって捕らえられたものであり、それをイエス様に捧げるということで、恵みに応答します。ここで大事なのは、増やしてくださるのは神ご自身だということ。商売というのは、そういう性質があります。市場経済を、かつてアダム・スミスが「神の見えざる手」という言葉で表現しましたが、自分自身を神に捧げることによって、神ご自身がそれを運用して下さり、増加させてくださるのです。それを新約聖書では、「御霊によって賜物が与えられている」として書かれています。また、品性については、聖霊の実として書かれています。具体的な働きや奉仕においても、また愛という神のご性質についても、聖霊の働きがあり、聖霊なる神が成長させてくださるのです。

そして大事なのは、「比べない」ことです。というのは、五タラントも、二タラントも、主人は全く同じ評価をしているのです。ここで私たちは絶えず、天を仰ぎ見ないといけません。どうしても私たちは、他者と比べて、他者のしていることで自分を評価します。そうではなく、主が評価されているのは、今、自分に任されていることに忠実であるかどうか、ということです。それらは、些細なもの、僅かなものにしか見えないかもしれません。けれども、主はそれを増やすことを願っておられるのです。

さらに、主人が、そのような忠実な者たちに多くの物を任せます。黙示録の七つの教会に対するイエス様の言葉は、「勝利する者」に対する約束がありました。例えば、「諸国の民を支配する権威を与える。」とイエス様はティアティラの教会の者たちに語られました。けれども、勝利する者とは、全てにおいて信仰の勝利を得た霊的エリートのことではありません。そうではなく、「あなたが持っているものを、わたしが行くまで、しっかり保ちなさい。(2:25)」と、自分が既に持っているものをただ保っているということなのです。けれども人々は、そのわずかな物を行わないのです。自分の与えられている時間や財産をもってイエス様に関わっていくことをしないのです。霊的な怠惰と言ってよいでしょう。それは次の一タラントのしもべの姿に表れてきます。

3B 没収 24-30

24 一タラント預かっていた者も進み出て言った。『ご主人様。あなた様は蒔かなかったところから刈り取り、散らさなかつたところからかき集める、厳しい方だと分かっていました。25 それで私は怖くなり、出て行って、あなた様の一タラントを地の中に隠しておきました。ご覧ください、これがあなた様の物です。』

一タラントの僕は、外の暗闇に追い出されます。つまり、地獄に投げ込まれる人です。なぜ、そんなことにまでなってしまったのでしょうか。「あなた様は蒔かなかったところから刈り取り、散らさなかつたところからかき集める、厳しい方」ということです。このような意地悪い方なのだ、ということです。神への信頼がなかつたのです。これこそが原因でした。私たちが最も気をつけなければいけないこと、警戒しなければいけないことは、「神に対するイメージ」です。悪魔は、巧妙に神が意地悪な方であると見せます。自分ができないことを無理やりやさせ、搾取するような方なのだと思わせるのです。このサタンの声を私たちは拒絶しなければいけないのです。そこで、神に近づくことができません。イエス様のことに関わろうと思わなくなります。信頼ができないために、恐れが必ず先行します。けれどもこれは致命的で、自らに滅びを招きます。「ヘブル 10:38-39 わたしの義人は信仰によって生きる。もし恐れ退くなら、わたしの心は彼を喜ばない。」しかし私たちは、恐れ退いて滅びる者ではなく、信じていのちを保つ者です。」

そして、「地の中に隠す」という行為ですが、これも霊的に致命的なことです。言い換えると、「神以外のもので安全を確保しようとする」ということです。地の中に隠せば、確実に一タラントは元本を割ることはありません。箆筒貯金であれば、絶対にその現金を失うリスクはありません。けれども、神なしで自分に安全で生活を確保しようとするのは、やがて自分を滅ぼします。私たちに与えられた人生というのは、不確実性を含むのです。けれども、主に従うということは、そこに危険もともなうのです。けれども神が救う方であり、神が自分の避難所とすることによって、自分が最後まで守られるのです。

26 しかし、主人は彼に答えた。『悪い、怠け者のしもべだ。私が蒔かなかったところから刈り取り、散らさなかつたところからかき集めると分かっていたというのか。27 それなら、おまえは私の金を銀行に預けておくべきだった。そうすれば、私が帰って来たとき、私の物を利息とともに返してもらえたのに。』

ここに主人は、彼の怠惰を叱責しています。銀行に預けるだけでも、よかつたのです。それさえも怠つたのですから。「箴 19:24 怠け者は皿に手を伸ばしても、その手を口に持って行こうとさえない。」とあります。

28 だから、そのタラントを彼から取り上げて、十タラント持っている者に与えよ。29 だれでも持っている者は与えられてもっと豊かになり、持っていない者は持っている物までも取り上げられるのだ。

ここの主人の待遇は、厳しいように見えます。けれども、この僕の願っていること、その意志を尊重しているがゆえ、タラントを取り上げたのですね。彼が、主人の与えるタラントに関わりたくないのですから、彼から取り上げたのです。これが神のなされることです。神に、イエス様に関わりたく

ない人は、関わらせないようにしてください。

けれども、なぜ十タラントの者に与えられるのでしょうか？これは、平等主義にしたがえば、酷いことのように聞こえるかもしれませんが。まるで金持ちがますます金持ちになり、貧乏はますます貧しくされるというように聞こえてしまいます。けれども、そういった物質的なことではなく、霊的なことを話しています。神は恵みを注ぐ器をお立てになります。そして、恵みをその器を通してお流しになります。そして、器を通して、その立てられている器に神の選びを認めます。ある人が他の人より多く祝福されるということは、神の国においては当たり前のように起こります。そして、他の人たちは、そのことをむしろ共に喜んで、その人を祝福します。「なぜ、私たちは祝福されないのか」と言って、妬んではいけません。

30 この役に立たないしもべは外の暗闇に追い出せ。そこで泣いて歯ざしりするのだ。』

「役に立たないしもべ」ということは、自分に与えられた恵みを無駄にするということです。その人は、「外の暗闇」に追い出されます。これは、光であられる神とキリストがおられるところから、離れているということです。新しいエルサレムには、神の都があります。そこから追い出されています。そして、「泣いて歯ざしりする」というのは、自分の失ったものに気づいた者たちの強い怒りの反応です。自己中心な心が、自分の思い通りにならなかった時の反応です。

したがって、この譬えから分かって来ることは、私たちが、主が来られることを用意するという教えは、御霊によって与えられた賜物を十分に活かす、主から与えられたものを、しっかりと管理するということに表れます。イエス様が来られることを意識している人々の中に、なんと隠れた防空壕のようなものを用意して、そこに備蓄をしているという人々がいます。来る大患難、核戦争になってもおかしくないために生き伸びるためです。けれども、主の来られることを前もって用意するのは、イエス様に用いられるために自分自身を明け渡すこと、そして与えられた賜物を用いることに他なりません。主が来られるのが近いことを知れば、良い業に豊かになります。

3A 憐れむ(最も小さき者) 31-46

そしてついに最後、オリーブ山でイエス様がお語りになるのは、既にイエス様が地上に再臨してからのことになります。これまで、「目を覚ましなさい」というメッセージは、主に教会の世界に語られていたと言ってもよいでしょう。けれども、天にある教会は、栄光の輝くイエス様と共に地上に戻って来ます(コロサイ 3:4)。そして 31 節以降は、世界のあらゆる諸国に対して、地上に戻って来られた主が宣言される言葉です。24 章 30 節にこうありました、「そのとき、人の子のしるしが天に現れます。そのとき、地のすべての部族は胸をたたいて悲しみ、人の子が天の雲のうちに、偉大な力と栄光とともに来るのを見るのです。」その時、大患難を通り過ぎた、生き残っている世界の者たちが全て、イエス様の前に出てきて申し開きをするのです。

1B 選り分け 31-33

31 人の子は、その栄光を帯びてすべての御使いたちを伴って来るとき、その栄光の座に着きます。32 そして、すべての国の人々が御前に集められます。人の子は、羊飼いが羊をやぎからより分けるように彼らをより分け、33 羊を自分の右に、やぎを左に置きます。

「すべての国の人々が御前に集められ」ることについては、ヨエルが預言してその場所が、「ヨシヤファテの谷」であることを話しています。「3:1-3 見よ。わたしがユダとエルサレムを回復させるその日、その時、わたしはすべての国々を集め、彼らをヨシヤファテの谷に連れ下り、わたしの民、わたしのゆずりイスラエルのために、そこで彼らをさばく。彼らはわたしの民を国々の間に散らし、わたしの地を自分たちの間で分配したのだ。彼らはわたしの民をくじ引きにし、少年を渡して、遊女を得、少女を売って、酒を得て飲んだ。」ヨシエファテの谷とは、オリーブ山と神殿の丘との間にある、ケデロン谷の部分です。その時は、オリーブ山はゼカリヤ 14 章によると南北に大きく分かれて、平らになっているので、そこに集まりやすくなっています。そして、イスラエルの民に対して何をしたかによって、裁きを行われます。追い散らして、くじ引きにしたり、奴隷として売ったり、そうやって悪いことをした者たちに、裁きを下されるのです。そのことをイエス様は、「この最も小さい者」という言葉を使って説明されます。

そして主が行われるのは、「より分け」ることです。羊と山羊をより分けるのですが、これは羊飼いは夜に行きます。山羊は暖かくしていないといけないので集めさせておきますが、羊は外の空気を欲しているので、外に出します。そのいつもの風景を取り上げながら、国々の民がそれぞれの行いにしたがって、選り分けられるということです。これは峻厳な現実です。今まで同じように生きてきた者たちが、主の前に出る時は、選り分けられます。御国に入るか、それとも地獄に投げ込まれるか、それぞれの主ご自身に対する態度によって決まるのです。

2B 正しい者(羊) 34-40

34 それから王は右にいる者たちに言います。『さあ、わたしの父に祝福された人たち。世界の基が据えられたときから、あなたがたのために備えられていた御国を受け継ぎなさい。』

右により分けられた者たち、すなわち羊たちは父から祝福されていると、イエス様は宣言されま。ここで興味深いのは、「世界の基が据えられたときから、あなたがたのために備えられていた」というところですね。初めから彼らを選ばれていたということです。神は、永遠の愛をもって、永遠の憐れみをもって人を選び、御国の中に招き入れておられることが分かります。キリスト者に対しても、神はこのことを行われました。「エペ 1:4 すなわち神は、世界の基が据えられる前から、この方であって私たちを選び、御前に聖なる、傷のない者にしようとされたのです。」

35 あなたがたはわたしが空腹であったときに食べ物を与え、渴いていたときに飲ませ、旅人であ

ったときに宿を貸し、36 わたしが裸のときに服を着せ、病気をしたときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからです。』

ここに書いてあることは、律法の中で命じられていたことです。「イザ 58:6-7 わたしの好む断食とはこれではないか。悪の束縛を解き、くびきの縄目をほどき、虐げられた者たちを自由の身とし、すべてのくびきを砕くことではないか。飢えた者にあなたのパンを分け与え、家のない貧しい人々を家に入れ、裸の人を見てこれに着せ、あなたの肉親を顧みることではないか。」けれども、不思議なのは、イエス様は「わたしに対して」と言われていることです。

37 すると、その正しい人たちは答えます。『主よ。いつ私たちはあなたが空腹なのを見て食べさせ、渴いているのを見て飲ませて差し上げたでしょうか。38 いつ、旅人であるのを見て宿を貸し、裸なのを見て着せて差し上げたでしょうか。39 いつ私たちは、あなたが病気をしたり牢におられたりするのを見て、お訪ねしたでしょうか。』40 すると、王は彼らに答えます。『まことに、あなたがたに言います。あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、それも最も小さい者たちの一人にしたことは、わたしにしたのです。』

正しい人たちは、気づいていませんでした。それら困窮している人たちは、実は王自身に対して行なっていたということ。今の世界でも、国民から敬愛されている国王がいますが、例えばヨルダン国王はその一人です。時々、タクシー運転手に変身して、一般民に紛れ込みます。英国のウィリアム王子も、ホームレスと人と一緒に野宿してみたという話もあります。イエスは、王でありながら、そうした小さき人々と一体化されました。いつも、小さき者たちに心を留めることを弟子たちに話しておられましたね。

けれどもイエス様はここでは、「これらのわたしの兄弟たち」と言われています。イエス様は、天に昇られましたが、弟子たちを兄弟たちと言って憚りませんでした。「ヨハ 20:17 …わたしの兄弟たちのところに行って、『わたしは、わたしの父であり、あなたがたの父である方、わたしの神であり、あなたがたの神である方のもとに上る』と伝えなさい。」ご自身の名によって神の子どもとなった者たちを、イエス様は兄弟と呼んでくださり、そして兄弟が困窮すれば、それはご自身が困窮しているということになります。

マザー・テレサは、この箇所が示されてインドの困窮している人々をイエス様だとみなして、仕えに行きました。この箇所はいろいろな解釈がありますが、そうではなく、イエス様のゆえに迫害を受け、困窮している人々だという解釈もあります。これも、新約聖書の中には迫害され、貧しくなり、牢屋に入れられているクリスチャンたちに愛の手を差し伸べることが書いてあります。また、さらに厳密な文脈を見ますと、大患難を通っているユダヤ人に対して、後に主に立ち返る残りの民に対して、周囲の異邦人たちがどのように助けたのか？という見方もできます。先のヨエル書 3 章に書

いてあったようにです。ホロコーストの時は、キリスト者の中でもユダヤ人を匿った勇敢な人々がいましたが、終わりの日にそのようにできるか？ということです。

いずれにしても、イエス様に仕えるというのは、とても具体的であることを知らないといけません。そこにいる人々、隣にいる人々、教会にいる兄弟姉妹、そういった人々に果たして自分は関わっているのかどうか？なのです。

3B 悪者(山羊) 41-46

41 それから、王は左にいる者たちにも言います。『のろわれた者ども。わたしから離れ、悪魔とその使いのために用意された永遠の火に入れ。』

先に祝福された者たちは御国に入れますが、ここで呪われた者たちは、永遠の火の中に入れられます。興味深いことに、祝福された者たちは、世界の基が据えられた時から備えられていたとある反面、こちらにはそのようなことは言われておらず、しかも、永遠の火は彼らのためではなく、悪魔とその使いのために用意されたものです。しばしば、極端なことを言う人たちがおり、信仰を持たない人たちは、実は永遠の昔からそのように定められているというのです。とんでもない発言ですが、神は救われる人々を初めから選ばれていることを話されますが、滅ぶ人についてご自身で積極的に定めることは決してなさいません。「I テモ 2:4 神は、すべての人が救われて、真理を知るようになることを望んでおられます。」

さらに、滅ぶ人というのは、神がそれを喜んで行われているのではないということも大事です。「強いられて行なわされている」と言った方がよいでしょう。ここにあるように、地獄というのは人のためではなく、「悪魔とその使いのために用意」されたものです。けれども、神はご自分を拒んで、悪魔が言っていることに従う人々を、強制的に、無理にやめさせることはできません。人は神のかたちに造られており、神は自由意志を持っておられるからです。人が、自由意志を取られて神を恐れるようにさせたら、人が人ではなくなってしまうのです。ですから、神はそのような人々がそこに行く人々に対して、「悔い改めなさい、わたしを信じなさい」と呼びかけることはできても、その自由意志だけは損なうことはできないのです。

そういった人々は、神の御国こそが地獄のような忌み嫌うところなのです。例えば、非常に美形で魅力があり、自分よりもはるかに賢い人がいて、人前に出ると、みんな自分のことはそっちのけで、彼の話ばかりに夢中になるような部屋に入れられて、そんなところに 24 時間、30 年間ずっと入れられていたら、とてつもなくきつい事でしょう。¹天国は、イエス様が礼拝を受けられるところです。そんなところに居てられない、こちらのほうが居心地がよい、として苦しんで後悔しているほう、地獄のほうを自分たちで選んでしまいます。

¹ <http://www.logos-ministries.org/blog/?p=8157>

42 おまえたちはわたしが空腹であったときに食べ物をくれず、渴いていたときに飲ませず、43 わたしが旅人であったときに宿を貸さず、裸のときに服を着せず、病気のときや牢にいたときに訪ねてくれなかった。』44 すると、彼らも答えます。『主よ。いつ私たちは、あなたが空腹であったり、渴いていた、旅人であったり、裸でいたり、病気をしていたり、牢におられたりするのを見て、お世話をしなかったでしょうか。』

興味深いことは、正しい人は自分の良い行いについては覚えておらず、悪者は自分の行った悪いことは覚えていません。信仰によって生きる人と、行いによって生きる人の違いです。行いに頼る人は、自分を絶えず正当化していますから、自分の悪が見えません。信仰によって生きる人は、自分は墮落していることを知っているから、神に拠り頼んで生きるしかないと思っています。だから、よい行いをして、それは神から来たものであることを知っているのです。

45 すると、王は彼らに答えます。『まことに、おまえたちに言う。おまえたちがこの最も小さい者たちの一人にしなかったのは、わたしにしなかったのだ。』46 こうして、この者たちは永遠の刑罰に入り、正しい人たちは永遠のいのちに入ります。」

このようにして、諸国の民が神の国に入れるのか入れないのかの基準は、あくまでもこのような正義によるのだということを知ることは大事です。柔和な者が、地を受け継ぐとイエス様は言われましたが、物理的に生き残ったとしても、決して御国に入ることができるのではないということです。そして、義を信じている人というのは、このように最も小さな者たちの一人にすることだということです。ある人がこんなことを言っていました。「イエス様は、王であられたのに、政治のようなマクロでは考えられなかった。人ごみの中に、一人の心病む人を見つけるといことを行われた」とのことです。²例えば人ごみの中で、いちじく桑の木によじ登る取税人ザアカイをイエス様は見つけられました。宮の境内にいた生まれつきの盲人を見て、彼を癒されました。

私たちにとっての、最も小さな者の一人は、本当に身近にいます。もしかしたら、自分よりも強そうな人かもしれません。自分が勝手に自分は弱くて、周りは強いと思い込んでいるかもしれません。そのように小さな人に行くことは、イエス様に行っているのだと言うことです。

² <http://yeshua.hatenablog.com/entry/2018/09/19/110647>